

Art · goût · beauté ou art · goût · bon ton. Paris, A.A. Godde, Bedin, 1921-1933. 130vols.
31.5×24.0cm <383. 135-A>

Hiler p. 46

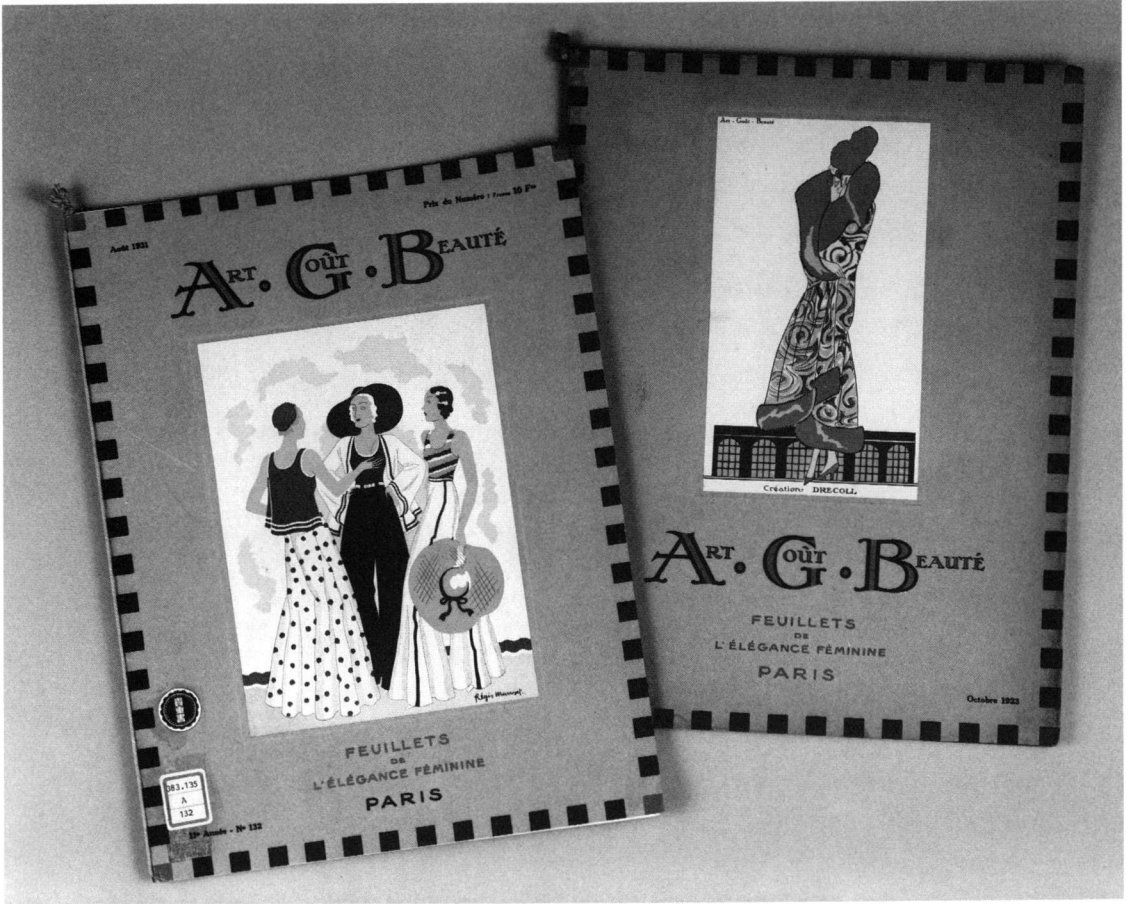
本誌は多くのすぐれたイラストレーターから支持されてできた最後の“いき”な雑誌とされる。「芸術と趣味と美しさ」もしくは「芸術と趣味と上品さ」という意味のタイトルで、通例 A・G・B と記されているのはタイトルと出版社名の A. Godde, Bedin とを兼ねたものであろうか。1921年秋までのタイトルの末尾は bon ton であるが、冬以降は beauté に改められている。

本誌のユニークさは、まず冊子の形式に現れている。「女性の優しさのフィエー」(Feuillets de l'élégance féminine) という副題が示すように、刷った全紙を四つ折のままで綴じることなく表紙をつけ、紐がけしたもので、毎月8枚、つまり1帖分の16頁仕立てというのが基本になっている。この形式は当時としては破格であり、わが国でも表紙のデザインや中味の一部模倣した婦人誌が早速現れた。国際情報社によって大正13年(1924)から昭和3年(1928)まで刊行された『婦人グラフ』<051.6-F>がそれで、この雑誌は当時モダニズムの象徴として話題を呼んだ。竹久夢二作の木版画などが、他の色刷挿絵とともに誌面に張り込まれているので、今では古書展でも予想外の高値を呼んでいる。

もちろん、手本となった A・G・B が数等もエレガントでほれほれする程の出来ばえなのは、当時の一級の挿絵画家 H・ルーイ (Rouit) が美術ディレクターを務めているからである。彼はしばしば自らの挿絵を別刷りにして誌面のあちらこちらに張り込んだ。そして、これらには必ず Art goût-beauté の文字が、あたかもサインのように刷り込まれてはいるものの、画家の名前やサインは一切記さずにアノニマス(無名)なのが本誌のポリシーなのでもあった。

ポショワール(刷り込み法彩色、英語のステンシル)の良さはとりわけ1923年から一層特色を増してくるのであるが、1925年以後になると部数が急増したためか、手作りのイメージが次第に失われ、量産向きの近代的印刷方式が目立ってくる。『婦人グラフ』はそのころの様式を手本にしたもので、たとえば布地のプリント・デザインを中表紙に毎号挿入したことなどにも、それがよく現れている。A・G・B がその中表紙を開始したのは1928年の春からである。

本館にもコンプリートに揃っているわけではなく、1921年の前半、1925・1926年および1931以降33年までにかかなりの欠落があるのは、今ではやむを得ないことであろう。(石山)



18 阿 爾 · 古 爾 · 博 特 的 表 紙 1923 年 10 月 号 ， 1931 年 8 月 号 → 111